

「十六歳は？」

「麦茶」

「十七歳は？」

「三ツ矢サイダー」

「三十七歳は？」

「アンバサ」

「二十四歳は？」

「キューカンバーカクテル。青くて甘い、良い年だね」

意外にも次から次へすらすらと出てくる。

「じゃあ〇歳は母乳？」

「母乳は一歳。ほんとの生まれたての〇歳は、羊水だね」

「じゃあ逆に、梅こぶ茶は何歳？」

ノゾミさんは目をつむって考え込む。いままでとうに当てはまる年齢を探しているのが実情かもしれないが、すでに頭の中にちゃんとある年齢飲み物カレンダーを仔細に点検しているようにも見えた。

「一〇六歳だね。こぶ茶は七十四歳のときに一回あるんだけど」

「梅こぶ茶までたどりつける人は、稀だろうな。ノゾミさんって、何歳？」

「三十八歳」

「三十八歳はなんなの？」

「もちろん赤ワインよ。うまく熟して今がちょうど良い時期」

信憑性はもろく崩れた。ノゾミさんは三十九歳になれば、三十九歳こそ赤ワインよ、と言いつつ出しよう

だ。

職場に戻る前に、私たちは畳の上で軽く体操をする。座って前屈してお互いの背中を押し合いっこすると、ココアの私は手が脛まで届き、赤ワインのノゾミさんは足の甲まで届いた。

「ちかごろのカーターは、どんな様子ですか」

「どうもこうもないよ、取引先でちやほやされてるみたいで、こっちに戻ってきても上の空だよ。気に入った女の子がいるみたいだね、取引先に行っても、すぐに帰らずにその子とばかりしゃべってるっていうから、あっちの会社で嫌われるのも時間の問題でしょう」

「強力なライバル出現ですね」

「マンガみたいなあおり文句つけないですよ。強力じゃないよ、どうせその子もカーターの中身を知ったら引くでしょ。カーターがカーターである限り、彼はだれのものでもないのよ。寝るくらいはするかもしれないけどね」

「あの人がだれかと寝るのは平気なんですか？」

「平気じゃないよ、どこかの女が彼の目を閉じた整った寝顔を眺めてるのかと思うと苦しい。でもあいかわらずお菓子持ったら寄ってくるし、ほめたら喜ぶのよ、あいつは。その点でつながれてるから、むなしくな」

フンと鼻息を出すノゾミさんはたくましい。ノゾミさんはAがいなくても、正真正銘自分一人で、自分の世界を守ることが出来る人なんだろう。誰かをまるごと獲得しようともがくより、自分との接点だ

けを見つめて、大切にできる人なんだろう。

「じつはね、最近隠し撮りしてるの。ほら、これ一人残業もせず、さっさと帰るところのカーター。周りの非難の視線も気にせず、わきめもふらずに出口に向かう姿、カッコいいでしょ」

うれしそうにノゾミさんが見せてきた携帯の画像には、移動速度が速すぎたのか、残像の流線の姿でしか映ってないカーターが横切っていた。

「そうだ、みつ子ちゃん、このイベントと一緒にいかない？ チケット一枚余ってるんだけど。大手俳優事務所ファン感謝パーティみたいなイベントなんだけど、カッコいい若手俳優がわんさかステージ上に登場するの」

ノゾミさんの取り出したチケットは興行名が「イケメン祭り」だった。

「イケメン祭り……」

あまりに直截的なネーミングに背筋が寒くなる。「いやね、彼らはギャグで言ってるのよ？ ほとんど自虐っていうか、ふざけてイベントにこんな名前つけてるの」

「でも実際に内容はイケメンの祭りなんですよね。別にふざけてなくて、そのまんまじゃないですか」

「うん、その名の通り見栄えの良い祭りよね。チケット代、三十%オフでいいよ」

「申し訳ないですが、私うまくしるか分からないので……」

とりあえず来てみたらいいのにと残念がるノゾミさんに謝っているうちに、昼休みが終わった。



わたせせいぞう画

「あらすじ」ローマに住む友人の誘いでイタリア行きを決めた「私」は、準備に忙しい。気を抜いた昼休みに、ノゾミさんが年輪とに似合う飲み物の話を始めた。三十三歳は、甘すぎないココアだという。



人たちが気付かずに見過している状況に、感謝しなくてはならないほど、実はやっぱりなたちである。

自分のデスクに戻ってけると、昼飯を食べて血液が頭から胃に移動した倦怠感と眠気、これから終業まで長い休憩がないという事実が合わさって、うんざりした。働き始めてからいまままでほとんど毎日、味わってきた感情だ。入社したときのこの会社は、わりと体育会系で、女性の先輩たちもピンバシ指導するぞという気概に満ちていた。彼女たちの指導は好みによって少し偏りがあり、ターゲットとして見定めた新人相手に、学生時代のいじめを思い出させる、すっぱい弾幕を張った。

彼女らの視線を避け、生意気のレットルを貼られないよう、しかしなめられないよう注意を払っていた私は、とくに指導を受けなかったが、どうしても一人見逃してくれない先輩がいた。彼女は私が入社した当時から私にはつめたく、私が彼女とその同僚のグループの前を通りかかると、「のんきを装って」と私に聞こえるくらいの音量ではっきり言った。先輩はばさついた茶髪のショートカットで、筋っぽく痩せて、でもどこか残る野性味がわりと魅力的で、けっこう苦労してきた目をしていた。たしかに私はのんきをよそおってるけど、本当は自分でもあつかいに困るくらい、激しい人間なのだ。周囲の

なんとなく見逃されていた私を、彼女は許しはせず、こっぴどくやられた。彼女が多分彼女自身とは関係のない理不尽な理由で——苦労性の人間にはどこまでも迷惑をかけてくる身内か親しい知り合いがつきもので——ワケアリを匂わせながらひっそりと会社を辞めたときには、胸をなでおろした。同時に彼女の慧眼をあらためて、心のなかで勝手にほめた。一目見ただけで、人間の本質を見抜けるのは尊敬する。冗談みたいに消しカス入りのお茶とか飲まされたけど、まあそれはそれ。これはこれ。

めざましい女性先輩たちは人生の展開が早く、次々と辞めていき、残ったのはみそっかすの私やノゾミさんのような女の人たちだった。私たちは現場が発狂するくらい、同じミスを何回もくり返したり、辞表もののミスも二度や二度は披露してきたが、家に帰ってコンタクトレンズあるいは会社用の眼鏡を外して、泣いて寝たあとは、かならず翌朝出勤した。くり返している間に、平気な事が増えてきて、ミスもなんとかす前で避けられるようになり、ただ長く会社に居ただけながらも、先輩には新しい業務を教えるようになった。三二お局は三二なり

に。いばらないのが長所だ。数少ない後輩にも若干ばかにされてくるくらいのも、ちゃらんぼらん湯温が、いまの私には心地よい。それでいて、私を見抜いたあの先輩に、ときどき会いたくなるから不思議だ。

辛い顔をしてないと頑張っていないと思われる日本社会は、息苦しい。仕事をエンジョイしているうちはまだまだ序の口と思われて、次々に新しい仕事が降ってくる。仕事は大変で、なによりも優先しなければいけないという共通認識があるから、面倒なことに関わりたくないときや単純に興味の無い出来事に巻き込まれそうになったとき、「仕事が忙しいから」と言い訳すれば、言われた相手は文句が言えない雰囲気は漂っている。実際に死ぬほど忙しいなら申し訳ないが、好きな、やりたいことは何を差し置いてでもやるくせに、やりたくないことに直面すると「仕事が」と言い出す人は、私は嫌い。やりたくないのは人の気持ちだからしょうがないけど、仕事ごと、社会に必要とされている、自分をアピールしながら相手に文句を言わせない言い訳が聞き苦しいと思う。だから私はどれだけそがしくて、できるだけ涼しい顔をしていたい。必要とされる喜びと利用される悲しみが混ざり合う、「仕事」に、魂まで食われてしまいたくない。

◆この連載は、原則として土曜日に掲載します。次週は、特別企画の予定です。

